海外レポート	**インド　ベンガルール**

海外ビジネスサポーター　田中　啓介

米国公認会計士。税理士法人及び米系企業経理部門での経験を経て、2012 年に南インドのチェンナイに移住し、現地でのコンサルティング会社を設立。中小企業の会計・税務アドバイザリー等多くの支援実績を持つ。現在はベンガルール在住。

「開発拠点としてインドが選ばれる理由」

（1）無尽蔵な IT 人材：限りない才能の宝庫

インドは世界最大の英語話者人口を持ち、これにより国際的なビジネスにおいてもコミュニケーションの障壁が少ないのが特徴です。インドの高等教育機関は毎年約数百万人の STEM（科学、技術、工学、数学）教育を受けた卒業生を輩出しています。世界の理工系学位取得者数に占めるインド人の割合が 20.6%であるのに対し、日本は 1.6%にしか過ぎません。インド人エンジニアを多く抱えるインド地場 IT サービス大手トップであるタタ・コンサルタンシー・サービシズ（TCS）の従業員数は 45 万人を超え、大手トップ 5 社の合計で従業員 100 万人を超えます。また、インドの労働コストは西洋諸国と比較して低く、同じ質の作業をより低コストで提供できることから、これまでインドのエンジニアは多くのグローバル企業から選ばれてきました。たとえば、アメリカやヨーロッパのエンジニアが時給 50 ドルから 100 ドル以上を要求するケースもある中で、インド国内の多くのエンジニアは時給 15 ドルから 30 ドルで雇用可能です。この大きなコスト差が、コスト効率を重視する企業にとって大きな魅力となっています。ちなみに、日本のエンジニアの時給は 2,000 円から 5,000 円程度（約 15 ドルから 30 ドル程度）と言われ、東南アジア諸国を考慮しても、上述のとおり、日本にとってのオフショア開発の目的はもはやコスト削減ではなくなってきています。

（2）技術の精鋭：インドの最先端技術力

インドは世界有数のエンジニアリング教育を誇り、毎年多くの高度な教育を受けた技術者が市場に参入しています。インドの技術者は、最新のプログラミング　言語や開発手法に精通しており、その技術力は世界中の企業から高く評価されています。特に人工知能（AI）や機械学習（ML）、アプリケーションのカスタマイズ、クロスプラットフォーム開発、クラウドコンピューティング、IT インフラストラクチャの管理、研究開発（R&D）などの分野で優れた実績を持っています。これらの技術力を支えている背景には、インド工科大学（IIT）を中心とした世界有数の技術教育機関を多数有していること、GAFAM を中心とする欧米ビッグテックで最先端の開発経験を積んでいるインド人が多いこと、また、インド国内のデジタルインフラの改善を目的とする「デジタルインディア（Digital India）」や、教育機関での新しいイノベーションと起業家精神を育てるプログラム「アタル・イノベーション・ミッション（Atal Innovation Mission, AIM）」など、インド政府によるイニシアチブやスタートアップ支援策が、インド国内の技術力を底上げしている一面もあるでしょう。

（3）テクノロジーを超えて：事業拡大に必要な圧倒的インターパーソナルスキル

また、インドがグローバルなオフショア開発市場で高い評価を受けている要因の一つに、インターパーソナルスキルがあります。「インターパーソナルスキル」とは、人間関係構築能力とも言えるスキルで、多様な文化・価値観・宗教・言語を持つインドという国で生まれ育ったインド人材が、根源的に持つコミュニケーション能力、チームワーク、問題解決能力など、プロジェクトを成功に導くために極めて重要となる人間関係スキルです。国際的なビジネスシーンにおいて、一切物怖じせずに多国籍人材と分け隔てなくコミュニケーションが取れ、協調性を持って異なる文化的背景にも配慮しながらプロアクティブにチームを構築でき、予期せぬトラブルが発生した際にも冷静に対処できる、むしろ追い込まれたときにこそ創造的な解決策をも見出すことができる能力・マインドセット（ジュガール：Jugaad）を持ち合わせているインド人は、私たち日本人にとって圧倒的に強力なパートナーとなり得ます。なぜこれだけ多くのインド人が世界の超一流企業のトップになれるのか、その理由のひとつにもこのスキルがあると考えています。